

長野県内出土の皇朝十二銭

西山 克己

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| I はじめに | V 皇朝十二銭の分布が意味するもの |
| II 長野県内での研究概略 | VI 恒川遺跡群出土の「和同開珎銀銭」について |
| III 皇朝十二銭が出土した遺跡概要 | VII おわりに |
| IV 長野県内出土皇朝十二銭の性格 | |

I はじめに

当論は筆者他が編集・執筆に関わり、平成9(1997)年3月31日に刊行された発掘調査報告書『篠ノ井遺跡群』(文献5)において、論究すべきテーマであったが、時間的制約や予算的制約に伴う筆者の力量不足によって、若干の考察しか行えなかつたことへの反省から、改めて考察をおこなうこととしたものである。

今回の目的は、県内出土皇朝十二銭の現状での集成と、その性格の再確認を主眼に置いたものである。

藤原京が都であった和銅元(708)年、日本最初の鋳造貨幣である「和同開珎」が誕生した。以後、天徳2(958)年に鋳造される「乾元大寶」までの250年間に、銅銭12種類、銀銭2種類、金銭1種類が鋳造されている。(第1表)

長野県では、飯田市恒川遺跡群出土の「和同開珎」をはじめ、未報告資料を含めると、現在86枚以上が確認され、詳細な資料調査を行えば、100枚程度の資料数になるものと考えられる。(第2・3表)(第1・2・3・4図)

II 長野県内での研究概略

長野県内の皇朝十二銭で最も注目されるのが飯田市恒川遺跡群出土の「和同開珎銀銭」であろう。この銀銭の発見は昭和52年度調査での田中・倉垣外地籍44号竪穴住居跡床面からの出土であった。

この発見に際し、昭和53(1978)年に、小林正春氏(文献45)や佐々木嘉和氏(文献46)が「和同

錢文(錢種)	發行年	天皇	典拠
和同開珎(銅銭)	和銅元(708)年	元明天皇	統日本紀
和同開珎(銀銭)	和銅元(708)年	元明天皇	統日本紀
萬年通寶(銅銭)	天平宝字4(760)年	淳仁天皇	統日本紀
大平元寶(銀銭)	天平宝字4(760)年	淳仁天皇	統日本紀
開基勝寶(金銭)	天平宝字4(760)年	淳仁天皇	統日本紀
神功開寶(銅銭)	天平神護元(765)年	称徳天皇	統日本紀
隆平永寶(銅銭)	延暦15(796)年	桓武天皇	日本後紀
富壽神寶(銅銭)	弘仁9(818)年	嵯峨天皇	日本紀略
承和昌寶(銅銭)	承和2(835)年	仁明天皇	統日本後紀
長年大寶(銅銭)	嘉祥元(848)年	仁明天皇	統日本後紀
饒益神寶(銅銭)	貞觀元(859)年	清和天皇	三代実録
貞觀永寶(銅銭)	貞觀12(870)年	清和天皇	三代実録
寛平大寶(銅銭)	寛平2(890)年	宇多天皇	日本紀略
延喜通寶(銅銭)	延喜7(907)年	醍醐天皇	日本紀略
乾元大寶(銅銭)	天德2(958)年	村上天皇	日本紀略

第1表 皇朝十二銭一覧

「開珎銀錢」についてふれられ、また昭和54(1979)年には小林正春氏(文献44)が恒川遺跡群の概報として「和同開珎銀錢」他について論究されている。

以後、発掘調査報告書や、県史・市町村史に、皇朝十二銭に関わる事実報告的な説明は散見しうるもの、その性格まで論究したものはあまり多くない。その中で注目しうるものとして、平成2(1990)年の石上周蔵氏(文献47)による、松本市下神遺跡出土皇朝十二銭への論考や、平成9(1997)年の西山克己(文献48)がふれた、長野市篠ノ井遺跡群出土の「承和昌寶」に関する報告がある程度である。

特に石上氏の論考は注目すべきものと言えよう。

また最近では、これまでの資料をまとめ、集成に重点を置きながらも、若干の論考を行ったものとして、平成9(1997)年の直井雅尚氏(文献9)や、小松学氏(文献33)、そして先にも示した西山克己(文献48)の集成をあげることができる。

これらは、桐原健氏(文献41)や、石上周蔵氏(文献47)以来の集成となり、資料蓄積の急増に驚かされてしまうものである。

当論に示した皇朝十二銭出土遺跡については、以上の論考や集成、さらには遺跡個々の報告書を参考にしたものである。

III 皇朝十二銭が出土した遺跡概要

1 田麦・江本庄一郎宅(文献1)

昭和21(1946)年12月8日、江本氏がカマドの修理の際、住宅南側の崖斜面に植えられた柿の木の根元の土を採掘した時に地下約2尺の所から中世備蓄銭が発見され、幅3尺、長さ2尺6寸、深さ3尺の木製の箱に入っていたと考えられている。

総計153貫(概算18万枚)が当時発見されたと考えられ、現在でも15万枚以上が残存し、銭種は数百種類と考えられている。この15万枚以上の備蓄銭の中に「萬年通寶」1枚(第3図17)、「隆平永寶」1枚(第3図28)が混在していた。

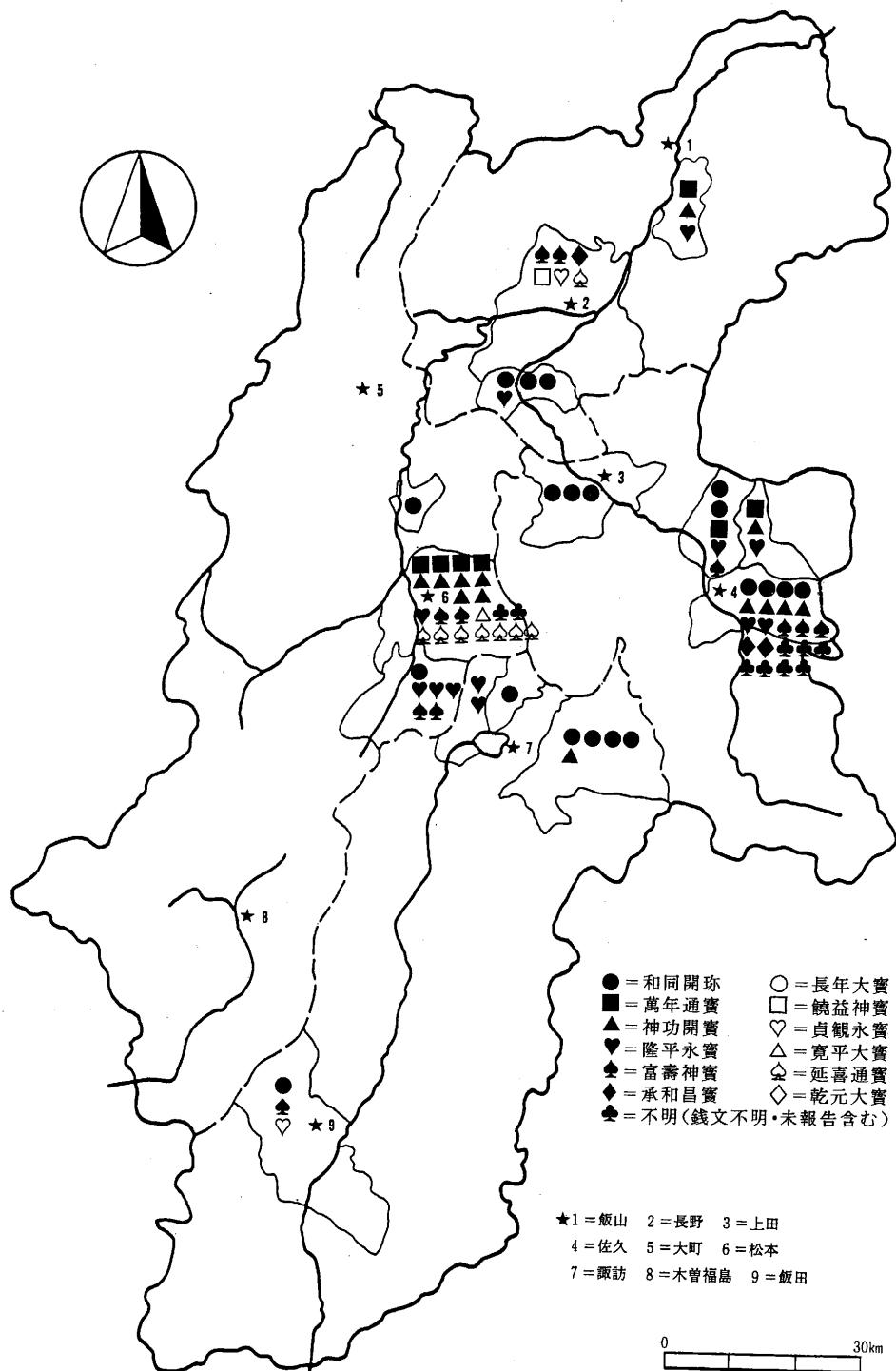
2 西条・岩船遺跡群(文献2)

扇状地末端に位置する弥生時代中期から後期にかけての集落跡が中心となる遺跡であるが、平安時代から中世にかけての集落も一部確認されている。

平成元年度から7年度にかけて調査が行われた結果、元年度の調査では木箱に入った34,162枚もの備蓄銭が発見されている。

平成7年度の調査では、埋納銭遺構が2基確認され、1つは珠洲焼きの甕に、もう1つは木箱に埋納されたものであった。

皇朝十二銭は、直径0.9m×0.8m、深さ0.6mの土壙内に、南に傾いて埋められていた口径40cm、胴部最大径約50cm、高さ47cmの珠洲焼きの甕内に他の備蓄銭とともに、「神功開寶」1枚が混在していた。備蓄銭の総数については現在整理中で不明である。



第1図 長野県内の皇朝十二錢出土分布図

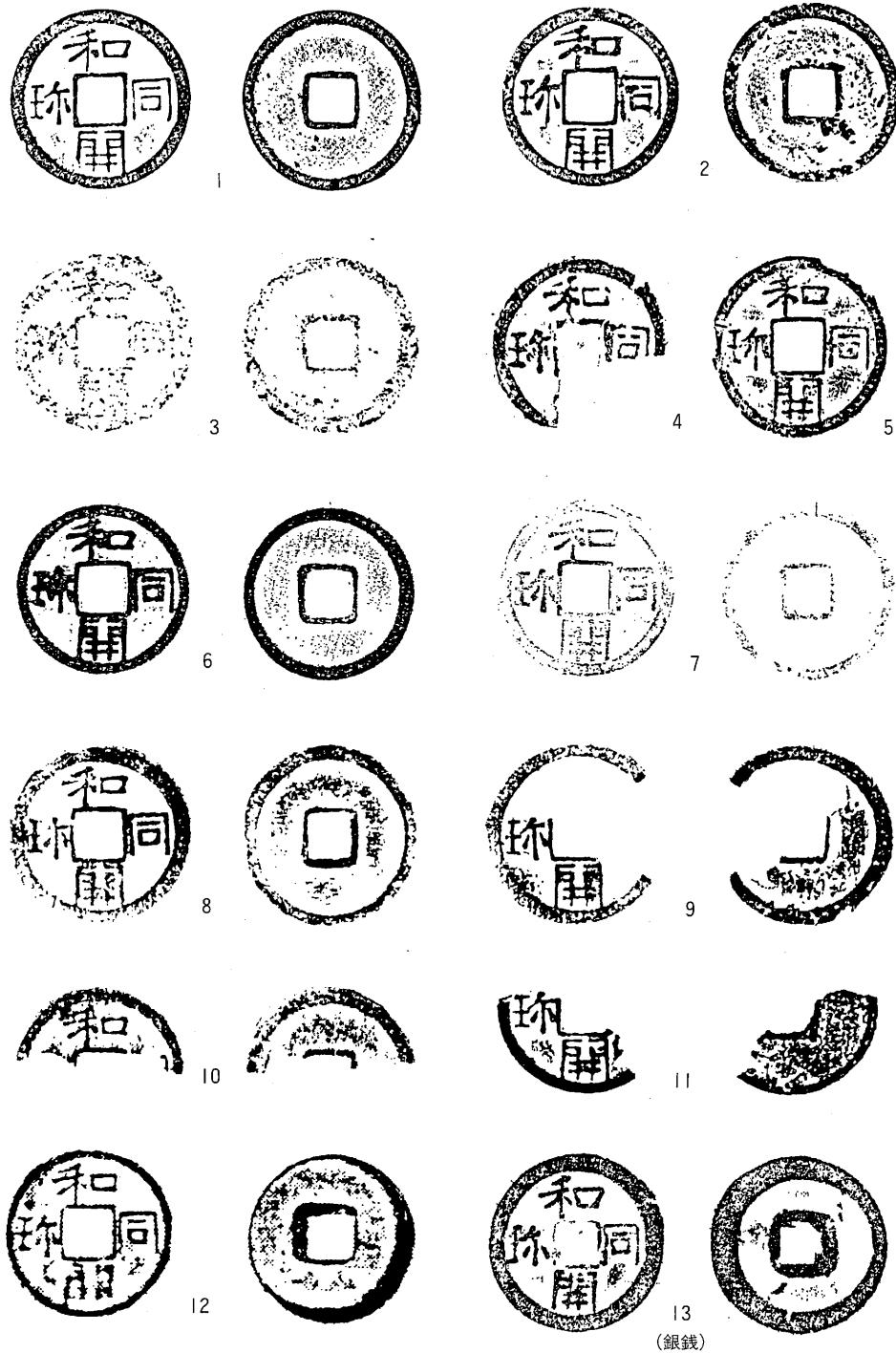
番号	遺跡名	皇朝十二銭											備考	文献		
		和同	萬年	神功	隆平	富壽	承和	長年	饒益	貞觀	寛平	延喜	乾元	不明		
	中野市		1	1	1									3		
1	田麦・江本家		1		1									2		1
2	西条岩船遺跡群			1										1	整理中	2
	長野市				2	1		1	1		1			6		
3	屋地遺跡					1								1		3
4	御所遺跡					1								1	整理中	4
5	篠ノ井遺跡群						1							1		5
6	複田遺跡								1					1	整理中	6
7	松原遺跡									1	1			2	整理中	7
	更埴市	3			1									4		
8	生仁遺跡		2											2		8
9	諏訪南沖遺跡	1												1	未報告	9
10	更埴条里遺跡				1									1	整理中	10
	上田市	3												3		
11	国分寺周辺遺跡	1												1	整理中	11
12	信濃國分寺跡	1												1		12
13	殿田遺跡	1												1		13
	佐久市	4	4	2	3	2							7	22		
14	前田遺跡	1												1		14
15	中道遺跡	1												1		15
16	栗毛坂遺跡群B		1											1		16
17	下聖端遺跡			1										1		17
18	高師町遺跡				1									1		18
19	聖原遺跡	1	1	1	1	1							7	12	未報告分あり	9・19
20	芝宮遺跡群	1	1											2	整理中	20
21	上ノ城遺跡			1										1		21
22	上久保田向遺跡						1	1						2		22
	小諸市	2	1		1	1								5		
23	中原遺跡群	1	1											2	整理中	23
24	大塚原遺跡			1										1		24
25	竹花遺跡					1								1		25
26	郷戸遺跡	1												1	整理中	26
	御代田町	1	1	1				1						4		
27	十二遺跡	1												1		27
28	野火付遺跡			1										1		28
29	根岸遺跡				1					1				2		29

第2表 長野県内出土の皇朝十二銭一覧表（北・東信）

番号	遺跡名	皇朝十二銭											備考	文献		
		和同	萬年	神功	隆平	富壽	承和	長年	饒益	貞觀	寛平	延喜	乾元	不明		
	明科町	1												1		
30	宮本の神社東側	1												1		30
	松本市	4	5	1	2					1	7	2	22			
31	下神遺跡	4	5									2	11			31
32	県町遺跡			1									1			32
33	三間沢川左岸				1						6		7		33・34	
34	小池遺跡				1								1		33・35	
35	一ツ家遺跡							1					1		33・36	
36	川西開田遺跡									1		1		1	整理中	33
	塙房市	1			3	2								6		
37	吉田川西遺跡					1								1		37
38	丘中学校遺跡				1									1		33
39	小沼田遺跡		1											1		33・38
40	吉田若宮遺跡	1				1							2		33・39	
41	下境沢遺跡				1								1			33
	岡谷市				2								2			
42	複塙外遺跡				1								1			9
43	(金山東遺跡)				1								1			40
	下諏訪町	1											1			
44	一の釜遺跡	1											1			41
	茅野市	4		1									5			
45	乞食塙古墳	4	1										5			42
	飯田市	1				1					1		3			
46	猿小場遺跡									1			1			43
47	垣川遺跡群	1				1					1		2	和同開珎銀錢		44
	長野県内出土枚数	20	8	11	11	11	3	0	2	2	1	8	0	9	86	

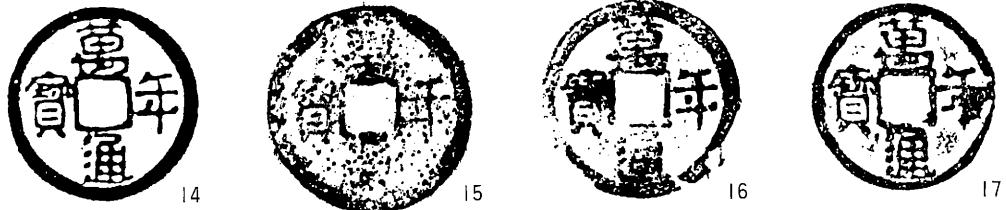
第3表 長野県内出土の皇朝十二銭一覧表（中・南信）

1. 和同開珎

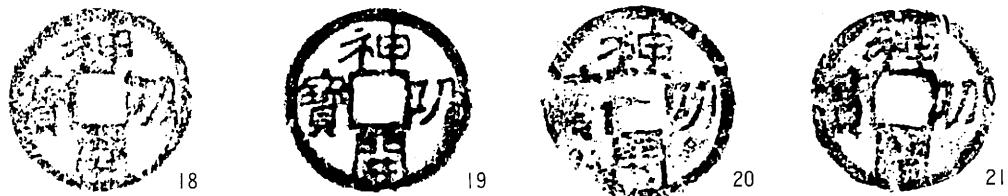


第2図 長野県内出土の皇朝十二銭 ① (S=1/1)

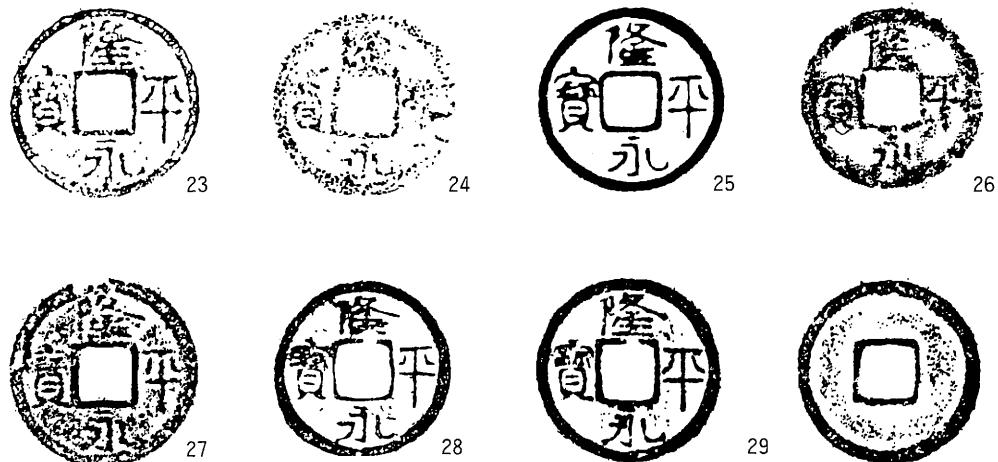
2. 萬年通寶



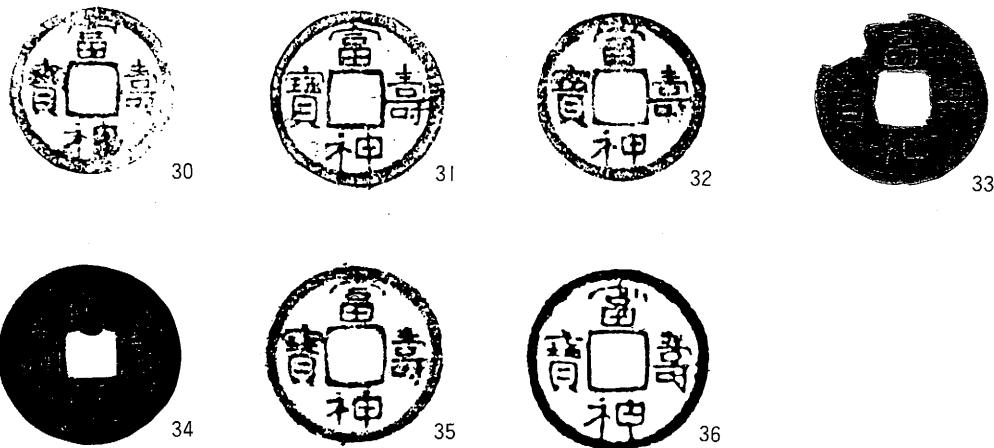
3. 神功開寶



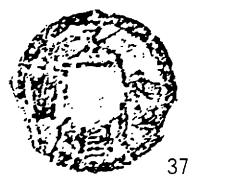
4. 隆平永寶



5. 富壽神寶



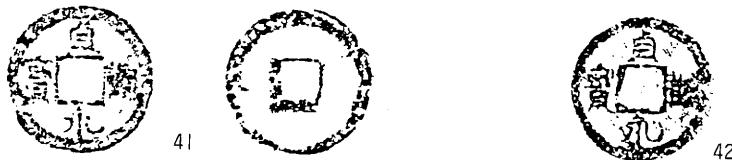
6. 承和昌寶



8. 饒益神寶



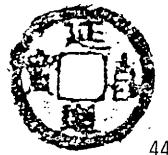
9. 貞觀永寶



10. 寛平大寶



11. 延喜通寶



3 屋地遺跡（文献3）

長野市松代町のシンボル的な山である皆神山の北西麓に位置し、蛭川による扇状地扇央部の東側にあたる。

古墳時代から平安時代にかけての集落跡で、竪穴住居跡は80軒以上検出されている。

皇朝十二銭は、「富壽神寶」1枚（第4図30）が11世紀代の主軸4.77m×短軸4.56mではほぼ方形のB1号竪穴住居跡の埋土中より出土している。

4 御所遺跡（文献4）

中世信濃守護小笠原氏の館跡と推定されている「御所」地籍一帯に含まれ、裾花川旧流路に沿って発達した微高地上に位置している。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は14軒調査されている。調査報告書は未刊なので出土状況は不明であるが「富壽神寶」1枚が出土している。

5 篠ノ井遺跡群（高速道地点）（文献5）

千曲川左岸の自然堤防上に立地する弥生時代中期から古代にかけての大集落遺跡である。

古代の竪穴住居跡489軒、掘立柱建物跡29棟他が調査されている。皇朝十二銭は、SB7404竪穴住居跡の床面にわずかに入った状況で「承和昌寶」（第4図37）・（第5図）が出土している。SB7404は南側部分が調査区外となるため、東西3m×南北不明の隈丸長方形と推定されている。

6 榎田遺跡（文献5・6）

千曲川右岸の自然堤防上及び後背湿地に立地し、弥生時代中期から古代にかけての大集落遺跡である。調査報告書は未刊で、現在整理中なので詳細は不明であるが、SD47溝跡より「饒益神寶」1枚（第4図39）が出土している。

7 松原遺跡（文献5・7）

善光寺平南東部の北側を金井山、南側を愛宕山によって限られた、千曲川右岸の三角形の自然堤防上に位置する縄文時代前期から中世にかけての大集落遺跡である。

報告書は未刊で、現在整理中なので詳細は不明であるが、SD1173溝跡の埋土中から、「貞觀永寶」1枚（第4図42）が出土し、またSB196竪穴住居跡の埋土中より「延喜通寶」1枚（第4図44）が出土している。

8 生仁遺跡（文献8）

千曲川右岸の屋代自然堤防の後背地で、五十里川や沢山川等の東西・南北に流れる小河川群によって形成された中洲状の微高地にある。

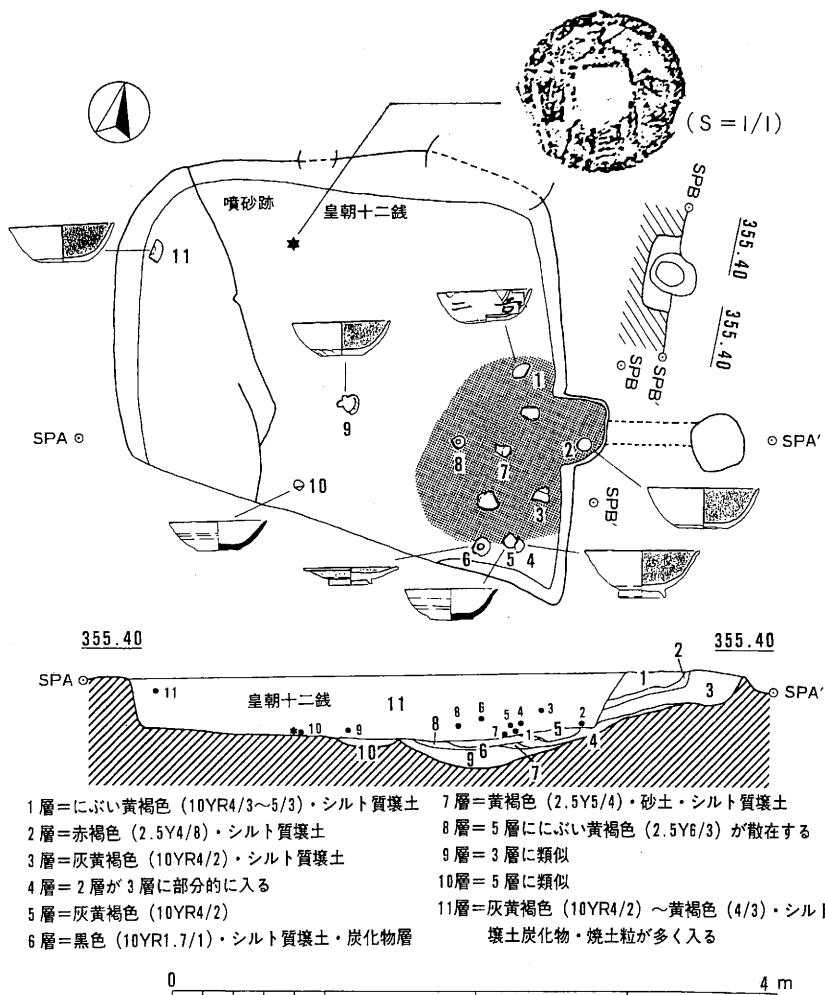
皇朝十二銭が出土したのは、第2地点といわれる調査地で、「和同開珎」2枚（第2図1・2）が出土しているが、出土状況の詳細については不明である。

9 諏訪南沖遺跡（文献9）

「和同開珎」1枚が出土している。未報告資料である。

10 更埴条里遺跡（文献10）

千曲川右岸の自然堤防背面から後背湿地にかけて広がる遺跡で、9世紀から13世紀にかけて



第5図 篠ノ井遺跡群 SB 7404豎穴住居跡と出土皇朝十二錢（文献5）

の条里水田跡や集落跡他が調査されている。

皇朝十二錢は、9世紀後半の千曲川による洪水前の9世紀代の面より、「隆平永寶」1枚が出土している。

11 国分寺周辺遺跡群（文献11）

千曲川右岸の最下位段丘に位置し、信濃国分寺跡がある段丘よりもさらに下位の段丘となる。弥生時代後期から平安時代にかけての集落跡で、194軒の豊穴住居跡他が検出されている。

皇朝十二錢は、「和同開珎」1枚（第2図4）が包含層より出土している。

12 信濃国分寺跡（文献12）

千曲川によって形成された第3段丘上にある。

聖武天皇の詔勅によって創建されたが、その年代については明らかにされていない。

皇朝十二銭は、「和同開珎」1枚が西廻廊より出土している。

13 殿田遺跡（文献13）

千曲川によって形成された段丘にあり、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡5軒他が調査された。

皇朝十二銭は、「和同開珎」1枚(第2図3)がグリッド内より出土している。

14 前田遺跡（文献14）

十二遺跡・根岸遺跡・野火付遺跡とともに鋳師屋遺跡群に属する。鋳師屋遺跡群は佐久市・御代田町・小諸市にまたがり、前田遺跡は、佐久市の最北端の小田井部南部の標高760m～765mの水田地帯に位置している。この地帯は、浅間山の南麓緩傾斜面上にあり、浅間火山噴出物によって地質構成された所である。

調査は1次から3次まで行われ、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡172軒、掘立柱建物跡184棟他が検出されている。

皇朝十二銭は、「和同開珎」1枚(第2図7)が、南北4.8m×東西4.9mではほぼ方形のH152竪穴住居跡のカマド東脇床面直上より出土している。

15 中道遺跡（文献15）

野沢平の中央部に位置する。

古墳時代の竪穴住居跡2軒、平安時代の竪穴住居跡4軒が調査された。

皇朝十二銭は、「和同開珎」1枚が、平安時代のH-1号竪穴住居跡(形状不明)のカマド内から出土している。また平安時代のH-2号竪穴住居跡の床面からは、二彩蓋が出土している。

16 栗毛坂B遺跡（文献16）

浅間山南麓末端部の田切地形に挟まれた台地上に位置する。

縄文時代後期から中世以降までを包含する遺跡で、奈良・平安時代の竪穴住居跡79軒、掘立柱建物跡89棟他が調査された。

皇朝十二銭は、「神功開寶」1枚(第3図19)が遺構外から出土している。

17 下聖端遺跡（文献17）

浅間山南麓末端部の谷に挟まれた田切り地形の帶状台地上にある。

古墳時代後期や平安時代の遺構が中心となり、平安時代の竪穴住居跡15軒他が調査されている。

皇朝十二銭は、「隆平永寶」1枚(第3図23)が、南北2.96m×東西2.90mの隈丸方形をした平安時代中期のH45号竪穴住居跡より出土している。出土状況についての詳細は不明である。

18 高師町遺跡（文献18）

佐久市のほぼ中央に位置し、2本の田切り低地に挟まれた帶状台地上にある。

平安時代の遺構が中心となり、竪穴住居跡24軒他が調査され、整然と並んだ掘立柱建物跡を取り囲むように竪穴住居跡が並んでいた。

皇朝十二銭は、「富壽神寶」1枚(第4図31)が、南北3.93m×東西3.81mの隅丸方形となる平安時代前期のH4号竪穴住居跡より出土しているが、出土状況については不明である。

19 聖原遺跡（文献19）

浅間山麓南斜面末端部の平坦な台地上にあり、古墳時代から平安時代にかけての大集落を形成している。

奈良時代の竪穴住居跡79軒、平安時代の竪穴住居跡154軒他が調査された。

皇朝十二銭は、「和同開珎」、「神功開寶」、「隆平永寶」、「富壽神寶」、「承和昌寶」他、合計12枚が出土しているが、詳細については報告書の刊行を待たねばならない。

しかしながら、皇朝十二銭の出土枚数や銭種の多さは、他遺跡では見られないものである。

20 芝宮遺跡群（文献5・20）

浅間山麓南斜面末端部の田切り谷に挟まれた台地上にある。

古墳時代後期から平安時代の集落跡が調査され、竪穴住居跡245軒、掘立柱建物跡約70棟他が調査された。

皇朝十二銭は、「和同開珎」1枚がSD03大溝跡から出土し、「神功開寶」1枚も出土しているが、現在整理中であり、詳細は不明である。

21 上ノ城遺跡（文献21）

佐久平を流れる湯川の北に臨んだ田切り台地の縁辺部にある。

古墳時代後期から平安時代にかけての遺構が調査され、竪穴住居跡49軒他が検出されている。

皇朝十二銭は、「神功開寶」1枚が出土しているが、詳細は不明である。

22 上久保田向遺跡（文献22）

浅間山麓南側に位置し、田切り地形に挟まれた台地上にある。

遺跡は台地全面に展開し、北には聖原遺跡がある。

平安時代の竪穴住居跡17軒他が調査された。

皇朝十二銭は、「富壽神寶」1枚が南北4.8m×東西4.7mの10世紀前半のH25竪穴住居跡あるいはD12号土壙より、どちらに伴ってもよいような状況で出土している。また、「承和昌寶」1枚(第4図38)が、南北5.5m×東西5.3mの9世紀後半と考えられるH31号竪穴住居跡より出土しているが、出土状況についての詳細は不明である。

23 中原遺跡群（文献5・23）

浅間山麓南斜面末端部の平坦な台地上にある。古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡で、竪穴住居跡130軒、掘立柱建物跡30棟他が調査された。

皇朝十二銭は、「和同開珎」1枚(第2図5)が、7号竪穴住居跡床面より出土し、「萬年通寶」1枚(第3図15)が、29号竪穴住居跡床面より出土している。現在整理中のため詳細は不明である。

24 大塚原遺跡（文献24）

浅間山の南に広がる緩傾斜地の田切り地形に挟まれた台地上にある。

古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡で、平成5年度の調査では、平安時代の竪穴住居跡が22軒検出されている。

皇朝十二銭は、「隆平永寶」1枚(第3図24)が東西6.28m×南北(残存部)6.50mで隈丸方形

の第20号竪穴住居跡より出土している。出土状況については不明である。

25 竹花遺跡（文献25）

浅間山の南に広がる緩傾斜地の田切り地形に挟まれた台地上にある。前に示した大塚原遺跡と同じ遺跡群に属する。

古墳時代後期から平安時代までの遺構を中心に、竪穴住居跡118軒、掘立柱建物跡86棟他が調査された。

皇朝十二錢は、「富壽神寶」1枚(第4図32)が、遺構外から出土している。

26 郷土遺跡（文献26）

浅間山南裾部、標高830mの緩傾斜面上にあり、縄文時代前期から後期の集落遺跡であるが、平安時代の竪穴住居跡も2軒みつかっている。

皇朝十二錢は、「和同開珎」1枚が、遺構外から出土している。

27 十二遺跡（文献27）

前田遺跡・根岸遺跡・野火付遺跡とともに鎌師屋遺跡群に属する。この地帯は、浅間山の南麓緩斜面上にある。

古代を中心に竪穴住居跡71軒、掘立柱建物跡75棟他が調査されている。

皇朝十二錢は、「萬年通寶」1枚(第3図14)が平安時代の南北4.8m×東西4.7mの隈丸方形であるH-28竪穴住居跡のカマド付近の埋土中より出土している。

28 野火付遺跡（文献28）

前田遺跡・十二遺跡・根岸遺跡とともに鎌師屋遺跡群に属する。立地的には先に示した2遺跡と同様である。

古代を中心に竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡8棟他が調査されている。

皇朝十二錢は、「神功開寶」1枚(第3図18)が、平安時代の南北3.1m×東西2.95mの隈丸方形であるH-13竪穴住居跡のカマド南側の床面より出土している。

29 根岸遺跡（文献29）

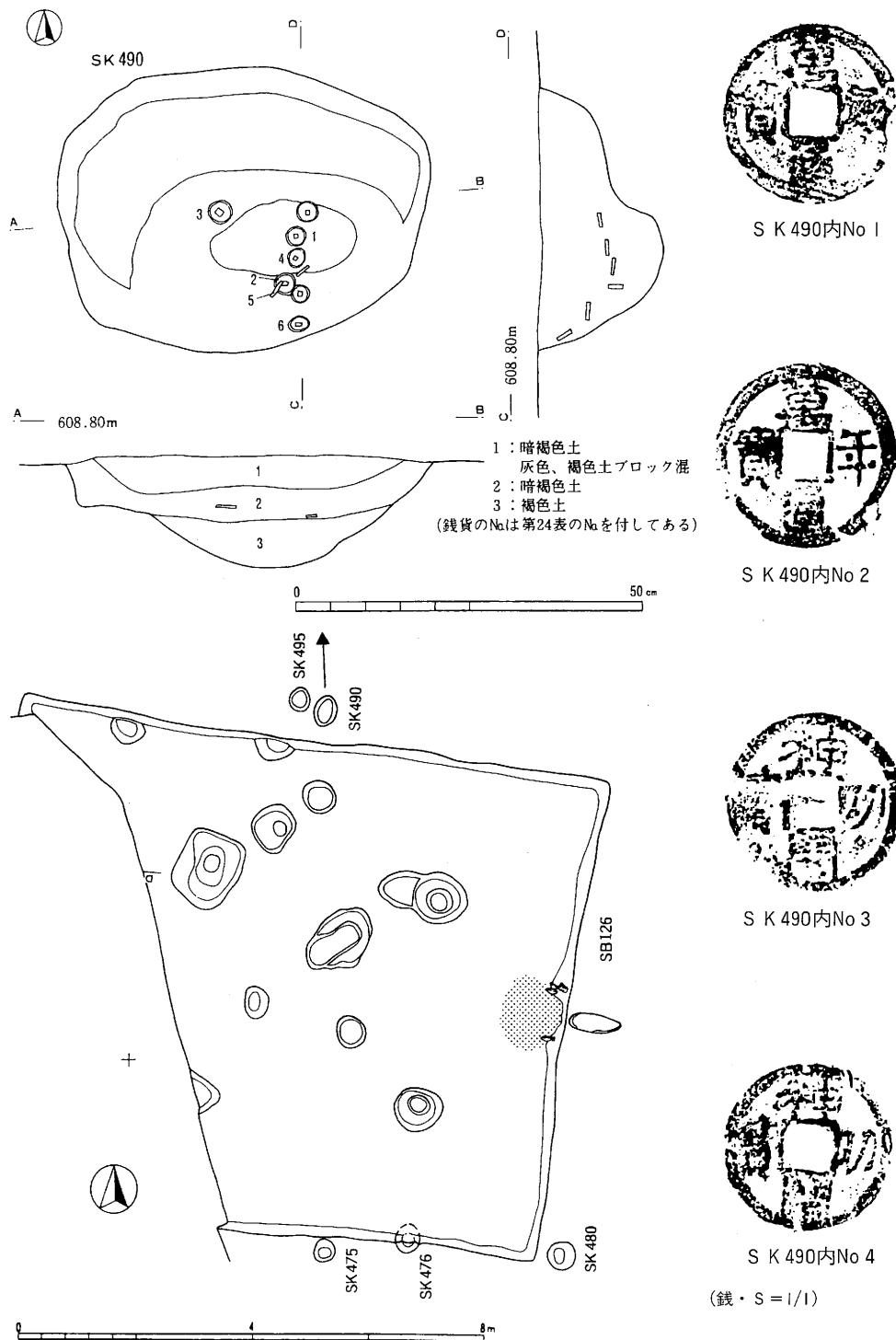
前田遺跡・十二遺跡・野火付遺跡とともに鎌師屋遺跡群に属する。立地的には先に示した3遺跡と同様である。

古代を中心に、竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡40棟他が調査されている。

皇朝十二錢は、「隆平永寶」1枚(第3図25)が、平安時代の南北4.6m×東西5.1mの隈丸方形であるH-18竪穴住居跡より出土している。出土状況についての詳細は不明である。また「饒益神寶」1枚(第4図40)が、平安時代の南北4.5m×東西4.7mの隈丸方形であるH-13竪穴住居跡の床面付近より出土している。

30 宮本の神社東側（文献30）

明科町宮本の神社東側から、宋錢とともに「和同開珎」1枚(第2図6)が出土している。中世以降の埋納錢の中に混在していたものと考えられている。



第6図 下神遺跡 SB126竪穴住居跡・SK 490土壤と出土皇朝十二銭（文献31）

31 下神遺跡（文献31）

奈良井川と鎖川との合流地点の南側に立地し、鎖川により形成された扇状地端部に位置している。古代の竪穴住居跡142軒、掘立柱建物跡58棟他が調査されている。信濃の初期荘園である「草茂庄」の存在を明らかにした遺跡である。

皇朝十二銭は11枚出土している。「萬年通寶」3枚(第3図16)・(第6図)、「神功開寶」4枚(第3図20・21)・(第6図)、不明2枚の計9枚が、54cm×40cmのやや楕円形をした8世紀末頃のSK490土壙から出土している。この遺構については、近接するSB126竪穴住居跡の建築時に伴う地鎮行為によるものと考えられたり、あるいは、溝で区画された土地に初めて占地した時に行われた地鎮行為によるものとも考えられている。

SK490への皇朝十二銭の埋納状況は非常に注目されるものである。(第7図)

その他、「萬年通寶」1枚が、SK554土壙より出土し、また「神功開寶」1枚が、SD108溝跡より出土している。

32 県町遺跡（文献32）

薄川の度重なる氾濫によって急速に堆積した扇状地上にある。

皇朝十二銭は、「隆平永寶」1枚(第3図26)が、平成8年度の調査で出土し、現在整理中のため詳細は不明であるが、遺構検出中の出土であったようである。

33 三間沢川左岸遺跡（文献33・34）

三間沢川左岸の台地上に立地し、平安時代の竪穴住居跡が250軒以上調査されている。

皇朝十二銭は、「富壽神寶」1枚(第4図33)が、平安時代の16号竪穴住居跡の床面より出土している。また焼失住居である161号竪穴住居跡からは「延喜通寶」6枚が溶着した状況で出土している。詳細については不明である。

34 小池遺跡（文献33・35）

東から西へ緩やかに傾斜する片丘丘陵の麓、塩沢川の開折により形成された台地上にある。

平成2年度の調査では、奈良時代の竪穴住居跡13軒、平安時代の竪穴住居跡62軒他が調査されている。

皇朝十二銭は、「富壽神寶」1枚(第4図34)が、平安時代の59号竪穴住居跡より出土している。詳細については不明である。

35 一ツ家遺跡（文献33・36）

東から西へ緩やかに傾斜する片丘丘陵の麓、塩沢川の開析により形成された台地上にあり、小池遺跡と近接している。

平成7年度の調査で、平安時代の竪穴住居跡37軒や、戦国時代の館関連の遺構他が調査されている。

皇朝十二銭は、「寛平大寶」1枚(第4図43)が、戦国期の館に関わる構構内より出土している。

36 川西開田遺跡（文献33）

奈良井川と三間沢川に挟まれるように立地し、三間沢川の対岸には、三間沢川左岸遺跡があ

る。

平安時代の竪穴住居跡 8軒他が調査されているが、現在整理中のため詳細は不明である。

皇朝十二銭は、「延喜通寶」1枚が、溝跡から出土している。

37 吉田川西遺跡（文献37）

田川中流域左岸の段丘面で、南北に伸びる東西幅300mほどの舌状台地上ある。

古代の竪穴住居跡266軒他が調査され、SK128墓からは縁釉陶器セットや八陵鏡他が出土している。

皇朝十二銭は、「富壽神寶」1枚（第4図35）が、10世紀初頭と考えられる南北4.8m×東西4.7mの159号竪穴住居跡の床面付近から出土している。

38 丘中学校遺跡（文献33）

田川左岸の段丘上にある。

昭和52年度の調査では、平安時代の竪穴住居跡14軒他が調査されている。

皇朝十二銭は、「隆平永寶」1枚が、廃土中から発見されている。

39 小沼田遺跡（文献33・38）

明治17(1884)年に畠地開墾中に埋納銭が発見された。埋納銭は、2つの甕に埋納されており、中世によくみられる備蓄銭と考えられ、唐銭や宋銭を主体に51,649枚もの古銭が埋納されていた。

皇朝十二銭は、「萬年通寶」1枚が備蓄銭内に混在していた。

40 吉田若宮遺跡（文献33・39）

昭和56(1981)年に宅地造成が行われた際、地表下35cmから45cmに常滑の大甕と木製容器に入った7万数千枚の埋納銭が発見された。中世の備蓄銭である。

皇朝十二銭は、「和同開珎」1枚と「富壽神寶」1枚が、備蓄銭内に混在していた。

41 下境沢遺跡（文献33）

東山山麓から流れる境沢川と小場ヶ沢川の開析により形成された幅の狭い台地上にある。

平安時代の竪穴住居跡32軒他が調査された。

皇朝十二銭は、「隆平永寶」1枚（第3図27）が、平安時代と考えられる南北6.8m×東南8.3mの21号竪穴住居跡の埋土中より出土している。21号竪穴住居跡は、遺跡内最大規模のものである。

42 榎垣外遺跡（文献9）

沖積低地にあり、東西600mから700m、南北150mから200mにわたって帯状に広がる遺跡である。

皇朝十二銭は、「隆平永寶」1枚が出土しているが、詳細については不明である。

43 金山東遺跡（文献40）

榎垣外遺跡に隣接し、現在では榎垣外遺跡内の遺構として考えられている。

大正14(1925)年に畠の耕作中に壺(藏骨器)が偶然発見され、その中に皇朝十二銭が入れられていた。

皇朝十二錢は、「隆平永寶」1枚(第3図29)が、少量の土や骨粉と混在していた。壺の上には皿状の坏が被せられていた。

44 一の釜遺跡（文献41）

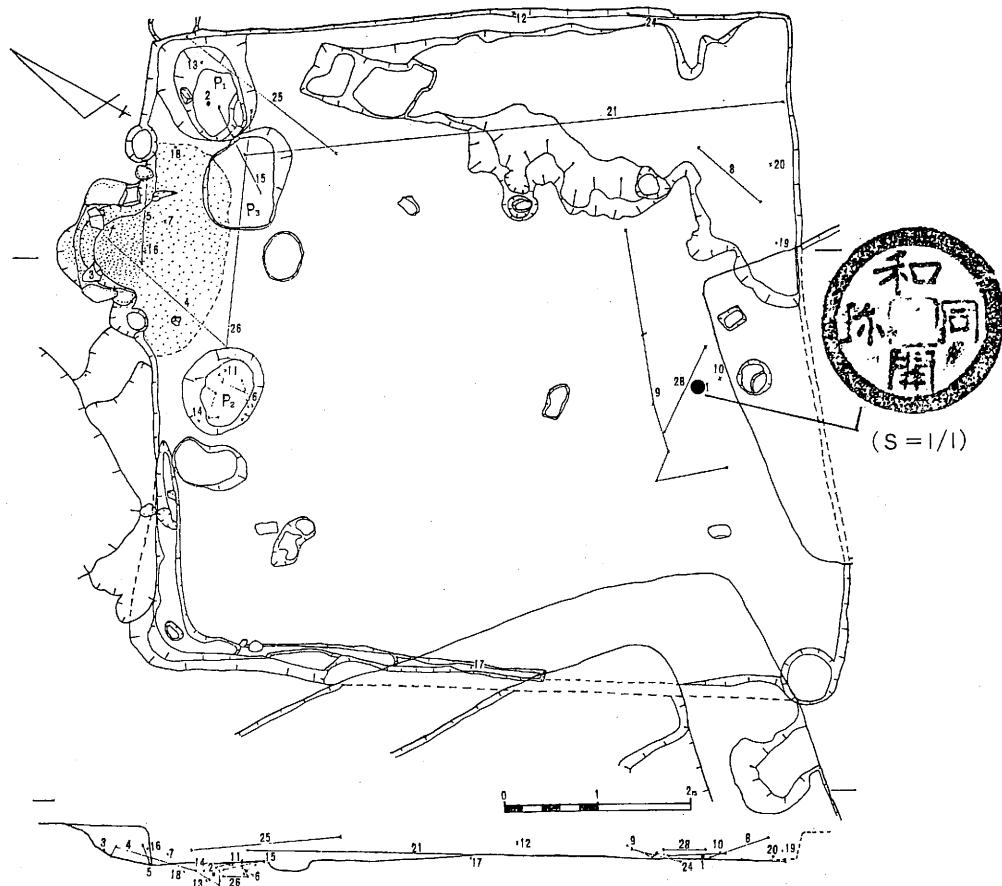
皇朝十二錢は、「和同開珎」1枚(第2図12)が出土している。

詳細については不明であるが、一の釜古墳からの出土であろうか。

45 乞食塚古墳（文献42）

扇状地の中央を流れる下馬沢川の東にあり、昭和7(1932)年5月に道路改修で取り壊され、出土品が地方新聞に報じられた後、調査が行われた。その結果、横穴式石室の長さ9m、石室の幅約4mで、羨道のない長方形石室であることがわかった。

皇朝十二錢は、「和同開珎」4枚(第2図8~11)と、「神功開寶」1枚(第3図22)の計5枚が、



第7図 恒川遺跡群田中・倉垣外地籍44号竪穴住居跡と出土皇朝十二錢（文献44）

直刀 2 本、鉄製鎧 6 点、鉄鎧 30 本、馬具轡 1 点、馬具鉢付金具 1 点、勾玉 2 個、ガラス丸玉・小玉 65 個、金環 6 点、鉄環 1 点とともに石室内より出土している。

この 5 枚について、後世の奉斎品と考えられ、「このような後世の奉斎品の出土する例は、古墳の主に対して後裔者による手厚い尊崇の続いた証拠とみられるものである」とされている。

46 猿小場遺跡（文献 41・43）

沖積中位の伊那谷第 6 段丘上にある。

平安時代の竪穴住居跡 25 軒他が調査された。

皇朝十二銭は、「貞觀永寶」1 枚（第 4 図 41）が、平安時代の南北 4.3 m × 東西 3.55 m の 38 号竪穴住居跡から出土している。出土状況については不明である。

47、恒川遺跡群（文献 41・44）

伊那谷第 9 段丘上にある。この遺跡群の東西に広がる台地の幅 200 m 程で南に延びた舌状台地先端部にある田中・倉垣外地籍で、古代の竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 10 数棟が調査された。

皇朝十二銭は、「和同開珎銀錢」1 枚（第 2 図 13）・（第 7 図）が、奈良時代の南北 7.2 m × 東西 7.0 m のほぼ方形となる 44 号竪穴住居跡の床面より裏返った状況で出土し、また「富壽神寶」1 枚（第 4 図 36）が、平安時代の南北 5.2 m × 東西 5.7 m の 2 号竪穴住居跡のカマド右にある穴底部焼土・灰下から出土している。

以上、皇朝十二銭出土遺跡の概略を示してきたが、その性格について考えてみることとする。

IV 長野県内出土皇朝十二銭の性格

篠ノ井遺跡群（高速道地点）S B7404 竪穴住居跡（第 5 図）、前田遺跡 H152 竪穴住居跡、中原遺跡群 7 号竪穴住居跡・29 号竪穴住居跡、野火付遺跡 H-13 竪穴住居跡、三間沢川左岸遺跡 16 号竪穴住居跡、恒川遺跡群 44 号竪穴住居跡（第 7 図）からは、皇朝十二銭が床面から出土している。

信濃における竪穴住居と皇朝十二銭との関わりを考えるにあたって、都での諸事例もみてみることとする。しかし都での建物構造は、掘立柱建物となっているので、信濃での諸事例とすべて同様に考える訳にはいかないが、建物への行為ということで、その性格についてもふれてみたい。

栄原氏（文献 49）は、平城京左京三条二坊十五坪の調査での S B970 掘立柱建物跡の身舎西北隅の柱穴から、「和同開珎」2 枚が、礎板下面に付着して出土している（文献 50）ことや、平城京左京四条四坊九坪の調査での S B2390 掘立柱建物跡東北隅の柱穴の根巻石下から、「和同開珎」1 枚が出土している（文献 51）こと、さらには、大阪府や石川県での調査例を引用されながら、京畿内やその周辺では、建物の柱を立てる前後に祭祀を行い、その際に銭種や枚数は関係なく埋納する行為が行われたとされ、これは地鎮のための行為であり、他の物品とともに、土地神にささげ、その怒りを鎮める力を持っていたものとされている。これらは、立柱行為や立柱祭と強く関わるものであると考えられている。

それでは豎穴住居跡より出土した皇朝十二銭はどのようなものであったのであろうか。

栄原氏(文献49)は、関東地方や東北地方での豎穴住居跡床面から皇朝十二銭が出土している遺跡をあげられ、これまでに知られている出土状況では、床面あるいは住居の近辺に穴を掘ったり、何らかの施設を設けて銭を埋納した行為が認められないことから、豎穴住居に関連する祭祀行為は、掘立柱建物の場合のような土中への埋納ではなく、上屋造営中もしくは完成後に上屋に置かれたものが、建物の廃絶時や撤去時に床面に落ちたか、火災の際に落ちたものではないかとされ、上棟祭や屋固祭に関わるものとされている。

この指摘は、今回示した長野県内の豎穴住居跡にも同様の事が言えるものである。

しかし、下神遺跡でのSK490土壙でのあり方や、恒川遺跡群での2号豎穴住居跡でのあり方はどのように考えたらよいのであろうか。

下神遺跡SK490土壙について、石上氏(文献47)が指摘されているように、「初めて占地したときに行なわれた地鎮である可能性」も考えられるが、報告書でもふれられているように、「上屋構造を考えるとSB126の一部(第6図)ともみなすことができ一中略一番安定した北壁のすぐ脇に埋納された」(文献47)との所見や、「SB126の建築時における地鎮のための埋納遺物と考えたい」(文献31)とされる所見、さらには、恒川遺跡群2号豎穴住居跡に関わる小林氏の報告(文献44)による「カマド右の穴底部に焼土・灰の下から出土した」とする出土状況を考えあわせると、栄原氏(文献49)の言う上屋構造のみへの行為だけとは言い切れないようである。

下神遺跡や恒川遺跡群での調査例は、地方での皇朝十二銭と集落、皇朝十二銭と豎穴住居の関係を考える上で、今後に課題を与えた良好な資料と言えよう。

それでは次に金山東遺跡や乞食塚古墳のような墳墓からの出土資料についてみてみよう。

金山東遺跡のように蔵骨器内に皇朝十二銭を埋納する事例は、あまり多くない。福岡県汐井掛墳墓群5号墳(文献52)でのように、皇朝十二銭を置いたり並べたりし、その上に蔵骨器が置かれるような事例の方が多いようである。

また乞食塚古墳のように横穴式石室への副葬例は、群馬県勢多郡宮城村の白山古墳(文献53)や、山口県萩市の中石塚古墳群(墳墓群)として有名な見島ジーコンボ古墳群の56号墳(文献54)などにみられる。

これらについて栄原氏(文献49)は、「死者のあの世における安全と平穏を保証する呪力や、死者の眠る土地を鎮める呪力をもつと信じられ、一定の祭祀・儀礼行為とともに副葬されたとみられる」とされている。

墳墓における皇朝十二銭の性格については、ある意味では、古墳時代における珠文鏡や重圓文鏡などの小型仿製鏡の性格に類似していたようである。(文献55)

以上、豎穴住居跡や墳墓での皇朝十二銭の性格をみてきたが、このような皇朝十二銭の流通貨幣以外の性格を裏付けるものとして注目したいのが「富本銭」の存在である。

「富本銭」は、銭面に「富本」と記された奈良時代の厭勝銭であり、銭面に吉祥語や神仙等をあらわし、凶災をおさえて、吉祥を求めるためのまじない銭なのである。(文献56)

このように、奈良時代にすでに厭勝銭があった事を考えれば、特別な銭文を記さなくても、鑄造された貨幣にその性格を与えて用いられても何ら不思議なことではないように思える。

また、寛政 6 (1794) 年に、大和国西大寺西塔跡の土中約 2.1m の所より、「開基勝寶」・「萬年通寶」・「神功開寶」が発見されたり (文献 57・58)、明治 9 (1876) 年 3 月には、大和国旧法華寺跡の金堂跡より、銅金・銅銀・水晶の念珠 43 個とともに、「和同開珎」・「萬年通寶」・「神功開寶」、そして唐銭の「開元通寶」が掘り出されている。 (文献 57・59)

これらの例は伽藍造営時の地鎮を意図したものと考えられるが、鑄造貨幣は当初より流通貨幣以外の性格をおびていた事が理解できる使用例と言えよう。

最後に、中野市の田麦・江本庄一郎宅、同西条・岩船遺跡群、塩尻市的小沼田遺跡群、同吉田若宮遺跡のような中世備蓄銭内での混在は何を意味しているのであろうか。

和同開珎に始まった鋳造銭は、年月が経過し、新しい銭文の鋳造をくり返すたびに旧銭は流通貨幣としての価値が低下していった。

それを示す資料として、史料①や以降の新銭鋳造時の史料にみられるように、旧銭の 10 倍もの価値を与えて新旧の入れ換えをはかったのである。

それではなぜそれほどに 12 種類もの新旧銭の入れ替えを行ったのであろうか。

史料①にみられるように、「萬年通寶」を新銭として造る際に、誇張はあろうが、私鑄銭が流通貨幣の半分に達していたようである。

しかし、この対策も、政府銭と私鑄銭の区別がむずかしい事、旧銭を停止し新銭に旧銭の 10 倍の法定価値を与えて、下落した銭貨価値を高い水準にもどそうとしても、結果的には新銭も再び私鑄銭が出まわることとなり、このくり返しが新銭の品位低下をまねくこととなっていたのであった。

奈良国立文化財研究所 (文献 61) (第 4 表) が示したように皇朝十二銭は徐々に銭径が小形化し、重量の軽量化をたどることとなる。

また、甲賀宜政氏 (文献 62) の成分分析によると、「和同開珎」・「萬年通寶」・「神功開寶」などの成分は、銅が約 80% 近くで、鉛が約 5% 前後、「隆平永寶」・「長年大寶」などは、銅約 70%、鉛約 10~20%、「貞觀永寶」・「延喜通寶」・「乾元大寶」などは、銅約 40~50%、鉛約 40~50% となり、見た目も、成分的にも品位低下は一目瞭然となる。

このような状況の中、特に地方では旧銭になればなるほど、より本来の 1 枚単位としての流通貨幣の価値を失い、先にも述べたような呪力を持つものとしてその価値を見い出され所有されたものと考えられる。

そして中世をむかえて、その価値観をも失うこととなり、多くの渡来銭とともに用いられる結果となつたのであろう。

それにしても中野市や塩尻市に備蓄銭が集中することは興味深い。

錢名	錢徑 (mm) 平均値	重量 (g) 平均値
和同開珎	24.53	2.27
萬年通寶	26.10	3.94
神功開寶	25.15	3.14
承和昌寶	20.74	1.51
饒益神寶	18.95	1.51
寛平大寶	19.13	2.12

第 4 表 皇朝十二銭計測値比較表 (文献 61)

V 皇朝十二銭の分布が意味するもの

長野県内の出土分布については、第1図や第2表・第3表に示したが、これまで直井氏(文献9)が指摘されているように、「和同開珎」が千曲川流域に多く、それ以降の皇朝十二銭は松本市に多い事がわかる。さらにこの指摘に付け加えるならば、東信の佐久地域では「和同開珎」から「富壽神寶」までの前半6銭のみが出土し、北信の長野市域では「富壽神寶」以降のものがみられることがわかる。

この佐久地域や長野市域の事については後に述べるとして、千曲川流域の更埴市城、上田市城にまずは注目してみたい。

平川南氏他(文献63)が屋代遺跡群出土木簡の研究の中で、更埴市を中心とする埴科郡屋代地域の初期国府の存在を指摘されたことから、その後にこれまで考えられていた上田市域を中心とする小県郡地域に国府が置かれ、さらにその後に松本市域を中心とする筑摩郡地域に国府が置かれたと考えられている。屋代木簡の研究や、これまでの研究を整理すると、8世紀前半に屋代地域→8世紀中頃から9世紀頃に小県郡(上田市域)→9世紀代以降に筑摩郡(松本市域)という国府所在地の推移が考えられる。これに皇朝十二銭の出土分布を考えあわせると、屋代地域や上田市域には「和同開珎」が集中し、松本市域には「萬年通寶」以降のものが集中することがわかる。国府所在地の推移と皇朝十二銭の出土分布の推移が同じ経過をたどる事が単なる偶然でなければ、地方において、これら皇朝十二銭を持ちえた人々の性格を考えあわせた時、その背景には、都からの国府への役人の往来、あるいは都と国府とを介する人々の往来が考えられ、国府所在地を考える上で、一つの考古学資料になりうるものと考えられる。

それでは佐久地域での出土状況は何を示すものなのであろうか。

佐久地域については、古代における文献史料上、空白な部分の多い地域であり、古代史上不明な事がが多い地域である。

しかし東国へ向うための要所として重要な地域であったことは言うまでもなく、また西山克己(文献64)が指摘しているように畿内系の暗文土器等も、県内では多く見られる地域であることから、都との往来は多かった地域であったと考えられる。

また、長野市域(更級郡・埴科郡北域)は、篠ノ井遺跡群(文献5)・松原遺跡(文献7)をはじめとして、「富壽神寶」鋳造以降に新興地域として、都との新たな関係が生まれた地域として理解できそうである。

さらに県内全体での出土分布を考えるならば、西山克己(文献48)が指摘しているように、「出土銭の多くは和銅元(708)年の‘和同開珎’・天平宝字4(760)年の‘萬年通寶’・天平神護元(765)年の‘神功開寶’と奈良時代の貨幣に集中し、9世紀以降のものについては極端な減少傾向を示す。このことは国家レベルでの貨幣経済を確立・浸透させることに積極的であった時代と、9世紀以降の、特に地方における貨幣経済の確立・浸透の挫折となる時代を象徴する現象」としても注目すべきことであろう。

VI 恒川遺跡群出土の「和同開珎銀銭」について

「和同開珎」の発行以前には、主として穀稻や布が貨幣同様に広く用いられていた。また遅くとも天武朝期には地金の銀や無文銀銭が鋳造貨幣的な存在であったようである。まずこれら鋳造貨幣出現以前の様子を栄原永遠男氏(文献65)の論文や弥永貞三氏(文献66)の論文を参考に簡単にふれてみることとする。

栄原氏(文献67)によると、「社会的に広く貨幣として機能していた穀稻や布は、材質や品質、価格の不安定性、また計量などの諸側面で、価値体系の基軸に位置するうえで、きわめて重大な弱点をもっていた」とされている。そしてこの弱点を克服するためには、金属が重要な位置をしめ、「金属によってはじめて定量的な価値体系が安定的に成立しうる条件が生じるのであり、貨幣経済が発展するための重大な要件の一つを満たすことができる」こととされている。

それではいつ頃から金属が貨幣的な存在として用いられたのであろうか。

弥永氏(文献66)や栄原氏(文献65)によると、史料②と史料③という二つの史料を関連させることによって、銀銭の流通は禁止するが、地金の銀の使用はさまたげないと理解され、地金の銀が少なくとも天武朝前後や古代社会において、価値体系の基軸となっていたことを明らかにされている。

さて、それでは古代における価値体系が地金の銀を基軸としていたものを、どのように十二種類の銅銭へと移行させたのであろうか。

栄原氏(文献69)は、史料④から、和同銀銭も和同銅銭も品位が低かったにもかかわらず、「和同開珎」への私鑄禁止は和同銀銭だけであったことから、その当時、主に流通していたのは和同銀銭であったと推定され、

また史料⑤から、律令国家は和同銀銭を廃止し、和同銅銭の流通促進に力を入れはじめた事を示すものとされている。

さらに史料⑥から、和銅2(709)年当時、よく使用されていたのは和同銀銭ではなかったかと推定されている。

以上、史料④・⑤・⑥から、「和同開珎」鋳造当初は、和同銀銭が主に流通していたであろうことを明らかにされている。

しかし、先ほどの史料②に示されているように、天武朝期には銀銭は用いず、銅銭を使用することが述べられ、また史料⑤にも銀銭をやめ、銅銭を使用するとされていることから、この後、律令国家の基軸となる流通貨幣は一貫して銅銭と方向づけされていたことがわかる。

それではどうして銀をやめ、一貫して銅にしたのであろうか。その大きな理由は、その原材料となる銀の不足と、逆に銅の豊富さからなる安定性という事情が大きかったと考えられる。

それでは和同銀銭、和同銅銭が併用されていた頃の換算はどうであったのであろうか。

史料⑦によれば、和同銀銭1文を銅銭25文に、銀1両を銅銭100文に換算使用するというものであった。

しかしこの記事には、律令政府が示した政策と矛盾する内容がみられる。先にも史料⑤で示

史料③

詔曰、用銀莫止。 (『日本書紀』天武十二年四月乙亥〔十八日〕条) (文献68)

史料②

詔曰、自今以後、必要銅錢、莫用銀錢。 (『日本書紀』天武十二年四月壬申〔十五日〕条) (文献68)

丁丑、勅、錢之為用、行之已久。公私要便、莫甚於斯。頃者、私鑄稍多、偽濫既半。頓將禁斷、恐有騷擾。宜造新樣、與旧並行。庶使無レ損於民、有上レ益於國。其新錢文曰「万年通寶」。以一當一旧錢之十。

銀錢文曰「大平元寶」。以一當二新錢之十。金錢文曰「開基勝寶」。以一當二銀錢之十。 (『続日本紀』天平宝字四年三月丁丑〔十六日〕条) (文献60)

壬午、詔、國家為政、兼濟居先。去レ虛就レ実、其理然矣。向者頒銀錢、以代前銀。又銅錢並行。比軒

盜逐利、私作濫鑄、紛乱公錢。自此今以後、私錢銀錢者、其身沒杖二百、加役當徒。知情不告者、各与同罪。 (『続日本紀』和銅二年正月壬午〔二十五日〕条) (文献70)

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。 (『続日本紀』和銅二年八月乙酉〔二日〕条) (文献70)

史料⑦

令天下百姓以銀錢一當銅錢廿五、以銀一両一當一百錢、行用之。 (『続日本紀』養老五年正月丙子〔二十九日〕条) (文献72)

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。 (『令集解』第四職員令二ノ三大藏省) (文献71)

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。 (『令集解』第四職員令二ノ三大藏省) (文献71)

史料④

丁丑、勅、錢之為用、行之已久。公私要便、莫甚於斯。頃者、私鑄稍多、偽濫既半。頓將禁斷、恐有騷擾。宜造新樣、與旧並行。庶使無レ損於民、有上レ益於國。其新錢文曰「万年通寶」。以一當一旧錢之十。

銀錢文曰「大平元寶」。以一當二新錢之十。金錢文曰「開基勝寶」。以一當二銀錢之十。 (『続日本紀』天平宝字四年三月丁丑〔十六日〕条) (文献60)

壬午、詔、國家為政、兼濟居先。去レ虛就レ実、其理然矣。向者頒銀錢、以代前銀。又銅錢並行。比軒

盜逐利、私作濫鑄、紛乱公錢。自此今以後、私錢銀錢者、其身沒杖二百、加役當徒。知情不告者、各与同罪。 (『続日本紀』和銅二年正月壬午〔二十五日〕条) (文献70)

史料⑥

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。 (『続日本紀』和銅二年八月乙酉〔二日〕条) (文献70)

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。 (『令集解』第四職員令二ノ三大藏省) (文献71)

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。 (『令集解』第四職員令二ノ三大藏省) (文献71)

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。 (『令集解』第四職員令二ノ三大藏省) (文献71)

したが、遅くとも和銅 2 (709) 年には銀銭を廃止していたにもかかわらず、それから 10 年が経過してもいまだに銀銭—銅銭、地金の銀—銅銭の換算が示されているのである。いかに当時の都や畿内を中心とする貴族や庶民にとって、地金の銀や銀銭への価値認識が高く、律令国家の法的禁止とは裏腹であったかが理解できよう。また、律令国家が銅銭への移行にどれほど苦労していたかが察せられる。

このようなことから、铸造貨幣の基軸を銅銭と考えながらも、なぜ和同銀銭が铸造されたかが理解されよう。

「和同開珎」铸造以前には、地金の銀の価値が高く、社会の中でその価値が根強く残っていたことから、地金の銀→銀銭→銅銭という円滑な移行を行うために、和同銀銭は重要な役割りをはたしたと言えよう。

栄原氏(文献69)は、「和同開珎」(銀銭)・(銅銭)について、史料①にみられる、「萬年通寶」(銀銭)・「大平元寶」(銀銭)・「開基勝寶」(金銭)との貨幣的役割りを比較され、

「和同開珎に銀銭と銅銭の 2 種類があったことと、天平宝字 4 年(760)の開基勝宝(金銭)、大平元宝(銀銭)、万年通宝(銅銭)の発行(『続日本紀』同年三月丁丑〔十六日〕条)とは、まったく意義をすることにすることがわかる。後者の三銭は、貴金属の金銀銅を錢貨として並べただけにすぎず、その発行には、和同銀銭が果たしたような役割は、もはや課されていなかったとみるべきである」と、和同銀銭の铸造意義を評価されている。

以上、「和同開珎銀銭」の流通貨幣としての歴史的役割りをみてきたが、飯田市恒川遺跡群出土の「和同開珎銀銭」(=以後「恒川銀銭」)は、どのような性格のものであったのだろうか。

奈良時代前半、「恒川銀銭」もこれまでみてきたように、都の貴族を中心に铸造貨幣としての役割りを大いにはたしたもののが 1 枚であったにちがいない。

この「恒川銀銭」は、伊那郡域の公民が仕丁あるいは衛士として都で仕えた際に養錢として入手したか、あるいは税を都へ運んだ際に入手したとも考えられるが、「和同開珎銀銭」の価値レベルや、恒川遺跡群の性格を考慮すると、都から役人が飯田の地(伊那郡衙)へ派遣された際に持参した可能性が高いと言えよう。

都で流通していた貨幣も、地方では律令国家の政策とは裏腹に、流通貨幣的価値はほとんどなかったものと考えられ、また、都からの役人は、都での生活を経験していた事によって、寺院や家屋等の建物を造る際の地鎮具、あるいは墳墓への埋納品としての使用を知りえた事から、「恒川銀銭」はもはや流通貨幣としての価値は失っていたものと考えられ、その性格は「皇朝十二銭の性格」で示したものであったと言えよう。

VII おわりに

これまでの県内出土資料から、竪穴住居跡・墳墓・土壙・中世備蓄錢内から発見された皇朝十二銭の性格をある程度確認したるものと考える。

考古学的資料としての検証については、長野県内の研究者による論考を参考にさせていただ

き、また、文献史料からの皇朝十二銭への論究については栄原永遠男氏の研究に拠る所が大きい。

今後、良好な資料の報告が増す事により、さらにその性格が明らかにされることとなろう。今後の調査、報告に期待するところである。

今回の論考は、「はじめに」でも示しましたが、『篠ノ井遺跡群』で充分な考察ができなかつたことから、改めて考察を行うこととしたものです。なお、雑誌「伊那」の1998年4月号・6月号に文章構成や体裁を若干変えて、本稿と同趣旨の論考を発表させていただきました。飯田市恒川遺跡群より貴重な「和同開珎銀錢」が出土していることから、下伊那地方の方々にその性格をより一層理解していただくことを目的としたものです。ここに一言つけ加えておきます。

最後になりましたが、今回の論を書くにあたり、貴重なご教示をいただきました会田進氏・青木和明氏・上田典男氏・臼田武正氏・千野浩氏・傳田伊史氏・直井雅尚氏・中島英子氏・藤沢高広氏・藤原直人氏、そして須藤隆司氏はじめ佐久市教育委員会の方々、そして未発表資料の掲載を心よくご了解していただいた上田典男氏はじめ松原遺跡整理担当班の方々や長野県埋蔵文化財センターの方々に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 1 日比野丈夫 「附録 長丘村出土古錢調査」『下高井』 1976年 長野県教育委員会 他
- 2 藤沢高広 「長野県中野市西条・岩船遺跡群出土の備蓄錢」『出土錢貨』第8号 1997年 出土錢貨研究会
- 3 矢口忠良 他 『屋地遺跡』II 1990年 長野市教育委員会
- 4 青木和明 「御所遺跡」『長野市埋蔵文化財センター所報』No.6 1995年 長野市埋蔵文化財センター
- 5 西山克己 他 『篠ノ井遺跡群』 1997年 勘長野県埋蔵文化財センター 他
- 6 藤原直人 他 『榎田遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報』7 1990年 勘長野県埋蔵文化財センター
- 7 原 明芳 他 『松原遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報』6 1989年 勘長野県埋蔵文化財センター
※文献5に関連して 上田典男氏のご教示によるところが大きい。
- 8 岩崎卓也 「城の内遺跡・灰塚遺跡・生仁遺跡・馬口遺跡」『長野県史 考古資料編』全一巻(二) 主要遺跡(北・東信) 1982年 長野県史刊行会
- 9 直井雅尚 他 「長野県の状況」『遺物からみた律令国家と蝦夷』 1997年 東日本埋蔵文化財研究会北海道大会準備委員会
- 10 河西克造 他 「更埴条里遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』9 1992年 勘長野県埋蔵文化財センター
- 11 川崎 保 他 「国分寺周辺遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報』11 1994年 勘長野県埋蔵文化財センター
- 12 川上 元 「信濃国分寺跡」『長野県史 考古資料編』全一巻(二) 主要遺跡(北・東信) 1982年 長野県史刊行会
- 13 尾見智志 「殿田遺跡」『上田市文化財調査報告書』第27集 1986年 上田市教育委員会
- 14 林 幸彦 他 『前田遺跡』I・II・III 1989年 佐久市教育委員会
- 15 佐久市教育委員会中道遺跡調査団 『佐久市前山中道遺跡緊急発掘調査概報』 1972年
- 16 寺島俊郎 他 「栗毛坂遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』2 1991年 勘長野県埋蔵文化財センター 他

- 17 羽毛田卓也 「長土呂遺跡群 下聖端遺跡」 I・II 『佐久市埋蔵文化財調査報告書』第9集 1992年 佐久市教育委員会 他
- 18 羽毛田卓也 他 『高師町遺跡』 II 1997年 佐久市教育委員会 他
- 19 三石宗一 『長土呂遺跡群 聖原遺跡』 I (現地説明会資料) 1989年 佐久埋蔵文化財調査センター
- 20 藤原直人 他 「芝宮遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報』10 1993年 勘長野県埋蔵文化財センター
- ※藤原直人氏のご教示にもよる。
- 21 佐久市教育委員会 『うえのじょう 佐久市岩村田上ノ城遺跡緊急発掘調査概報』 1974年
- 22 森泉かよ子 『上久保田向』 III 1994年 佐久市教育委員会 他
- 23 近藤尚義 他 「中原遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報』9 1992年 勘長野県埋蔵文化財センター
- 24 星野保彦 他 『大塚原(第2次)』 1994年 小諸市教育委員会
- 25 花岡 弘 「竹花遺跡」『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』 1994年 小諸市教育委員会
- 26 桜井秀雄 他 「郷土遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報』11 1994年 勘長野県埋蔵文化財センター
- 27 堤 隆 『十二遺跡』 1988年 御代田町教育委員会
- 28 羽毛田伸博 『野火付遺跡』 1985年 御代田町教育委員会
- 29 堤 隆 『根岸遺跡』 1989年 御代田町教育委員会
- 30 倉科明正 他 「奈良・平安時代 宮本出土の古銭」『明科町史』上巻 1984年 明科町史刊行会
- 31 石上周蔵 他 『下神遺跡』 1990年 勘長野県埋蔵文化財センター 他
- 32 荒木 龍 他 『県町遺跡』 X I 1997年 松本市教育委員会
- 33 小松 学 「松本平出土の皇朝十二銭」『平出博物館紀要』第14集 1997年 塩尻市立博物館
- 34 竹原 学 他 『三間沢川左岸遺跡』 I 1988年 松本市教育委員会
- 35 松本市教育委員会 『小池遺跡』 1991年
- 36 太田圭郁 他 「一ツ家遺跡」『松本市文化財調査報告』No.126 1997年 松本市教育委員会
- 37 小松 望 他 『吉田川西遺跡』 1989年 勘長野県埋蔵文化財センター 他
- 38 小林康男 「塩尻市宗賀小沼田出土の埋蔵銭」『平出博物館紀要』第14集 1997年 塩尻市立博物館
- 39 大沼田三好 他 「塩尻市広丘吉田若宮出土の備蓄銭」『平出遺跡考古博物館(歴史民俗資料館)紀要』2 1985年 塩尻市立博物館
- 40 戸沢充則 「金山東遺跡」『岡谷市史』上巻 1973年 岡谷市
- ※現在 金山東遺跡は榎垣外遺跡の一つとしてとらえられている事から 第3表のような表記とした。
- 41 桐原 健 「奈良・平安時代の道具」『長野県史 考古資料編』全一巻(四) 遺構・遺物 1998年 長野県史刊行会
- ※『下諏訪町史』においても詳細不明
- 42 守谷昌文 他 「乞食塚古墳」『茅野市史』上巻 1986年 茅野市
- 43 小平和夫 「律令社会の崩壊—平安時代—」『下伊那誌』第1巻 1991年 下伊那誌編纂會
- 44 座光寺バイパス遺跡調査団 「飯田市座光寺恒川遺跡群発掘調査概報」『信濃』III-31-4 1979年 信濃史学会
- 45 小林正春 「恒川遺跡出土の和同開珎銀銭」『伊那』1978年3月 1978年 伊那史学会
- 46 佐々木嘉和 「銀の和同開珎」『伊那』 1978年3月 1978年 伊那史学会
- 47 石上周蔵 「第4章第2節 3金属製品(2)銅製品・錢貨 イ銭貨」『下神遺跡』 1990年 勘長野県埋蔵文化財センター 他

- 48 西山克己 「第4章成果と課題 第6節金属製品について 2 皇朝十二銭」『篠ノ井遺跡群』 1997年 (財)長野県埋蔵文化財センター 他
- 49 栄原永遠男 「第7章日本古代銭貨と呪力」『日本古代銭貨流通史の研究』 1993年 城書房
- 50 町田 章 他 『平城京左京三条二坊 奈良市庁舎建設地発掘調査報告』 1975年 奈良国立文化財研究所
- 51 奈良国立文化財研究所(松村恵司)編 『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告書』 1983年 奈良県教育委員会
- 52 上野精志 「VI汐井掛墳墓の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XX 1978年 福岡県教育委員会
- 53 尾崎喜左雄 「群馬県勢多郡白山古墳」『日本考古学年報』7 1958年 日本考古学協会
- 54 斎藤 忠 他 『見島古墳群—山口県萩市見島文化財総合調査報告書別刷』 1965年 山口県教育委員会 他
- 55 西山克己 「第4章成果と課題 第6節金属製品について 1 青銅鏡」『篠ノ井遺跡群』 1997年 (財)長野県埋蔵文化財センター 他
- 56 館野和己 「富本銭について」『週刊朝日百科 日本歴史』51 1987年 朝日新聞社
- 57 藤井一二 「第10章埋銭の風習と祈り」『和同開珎—古代貨幣事情をさぐる』 1991年 中央公論社
- 58 穂井田忠友 「中外銭史」『日本経済叢書』29 1916年 日本経済叢書刊行会
※文献57も参考にした。
- 59 柏木賀一郎 「上代板金考」『学芸志林』第5巻 1879年 東京大学出版会
※文献57も参考にした。
- 60 青木和夫 他 「続日本紀」卷第二十二『新日本古典文学大系』14 1992年 岩波書店
- 61 佐藤興治 他 「別表9 銭貨計測値一覧表」『平城京発掘調査報告』VI 1975年 奈良国立文化財研究所
- 62 甲賀宜政 「古銭分析表」『考古学雑誌』第9巻第7号 1919年 考古学会
※栄原永遠男 「和同開珎の誕生」『週刊朝日百科 日本歴史』51 1987年 朝日新聞社 も参考にした。
- 63 平川 南 他 「第五章考察」『長野県屋代遺跡群出土木簡』 1996年 (財)長野県埋蔵文化財センター 他
- 64 西山克己 他 「信州の6世紀・7世紀の土器様相—現時点での概略としてー」『東国土器研究』第4号 1995年 東国土器研究会
- 65 栄原永遠男 『日本古代銭貨流通史の研究』 1993年 城書房
- 66 弥永貞三 「奈良時代の銀と銀銭について」『日本古代社会経済史研究』 1980年 岩波書店
- 67 栄原永遠男 「第1章和同開珎の誕生 3 地金の銀」『日本古代銭貨流通史の研究』 1993年 城書房
- 68 坂本太郎 他 「日本書紀」卷第二十九『日本書紀』下 1965年 岩波書店
- 69 栄原永遠男 「第1章和同開珎の誕生 4 和同開珎銀銅錢」『日本古代銭貨流通史の研究』 1993年 城書房
- 70 青木和夫 他 「続日本紀」卷第四『新日本古典文学大系』12 1989年 岩波書店
- 71 黒坂勝美 他 「令集解」第一『新訂増補国史大系』 1992年 吉川弘文館
- 72 青木和夫 他 「続日本紀」卷第八『新日本古典文学大系』13 1990年 岩波書店